

環境と人権のまちづくり

世界に発信!!
七条通界わいの魅力



NPO 法人京都景観フォーラム
2016年3月

まえがき「世界に発信！！七条通界わいの魅力」 ～環境と人権のまちづくり

京都・七条通界わい（東大路通～西大路通）のわずか4kmの間には世界に誇るべき歴史・文化資源が集積し、さらに京都市立芸術大学の移転によって文化創造の拠点になろうとしている。この動きを地域、大学、行政、文化団体の連携で育て、京都全体の活力やブランド力につなげたいというのが、このプロジェクトの目的である。

2013年度には、地域のまちづくり資源を調査し冊子にまとめてツアーを行い、2014年度には、NPOや若者グループ、先進的な都市緑化の試みを取上げた冊子を発行し、地域の学区、京都市、芸術大学などが集う「京都市立芸術大学を核とする崇仁エリアマネジメント」にも参加した。

本年（2015）度は同エリアマネジメントの部会「歴史・文化・景観を守り育てるネットワーク」の立上げ・運営に協力し、地域、大学、クリエイター、NPOが歴史と未来を語り合う場づくりを目指した。

七条通界わいはJR京都駅のある都心であるにもかかわらず、鴨川、高瀬川、寺社仏閣、庭園などの緑水環境に恵まれている。さらに、梅小路公園「いのちの森」、京都駅ビル「緑水歩廊」、ヨドバシカメラ「日本最大級の壁面緑化」、京都水族館「京の里山ゾーン」など、先進的で本格的な自然環境の創出がなされている。

これらの「生きものの居場所」がネットワークをつくり、それを足掛かりに、東山や鴨川の自然がまちなかに広がってゆけば、環境都市の世界モデルとして、京都の価値

は高まる。それは居心地や景観のいい場所を増やしてゆくことでもある。

このように七条通界わいには、もっと魅力的になるべき空間がある。この冊子では、緑水景観を考える材料として景観シミュレーションを提示する。

一方で、過去に都市化によって失われた自然もある。かつての西七条村（西大路七条付近）には、豊富な湧水を利用したセリ田があり、アジサバと呼ばれた淡水魚（ミナミトヨミ）が生息していたが、1960年代に、地下水の過剰なくみ上げや宅地化でセリ田が無くなり、アジサバは地上から絶滅した。地域の原風景として記憶し、環境再生の参考としたい。

さらに、プロジェクトの初期に台湾の日本研究者および財団法人台湾民主基金会より、崇仁・東九条地区でマイノリティの人権とまちづくりに関するシンポジウムを開催したいという要請があり、これをお受けすることとなった。まさに世界に発信するプロジェクトへと発展したのである。

この本冊子の構成も前半は「環境」、後半は「人権」がテーマとなっている。この2つのコンセプトは、七条通界わいが世界に向けて発信する、古くて新しい京都の魅力である。

2016年3月

NPO 法人京都景観フォーラム

七条通界わいプロジェクトリーダー
中村伸之

目次

I. 緑水環境の歴史と未来

- 1. 東山・鴨川の自然を街へ 1
- 2. 西七条村の面影 2
- 3. 渉成園の生きもの多様性 3
- 4. 高瀬川を歩く 5
- 5. 緑水環境の未来を考える 8
 - 5-1. 京都駅ビル・空中経路 8
 - 5-2. 京都駅前広場 9
 - 5-3. 駅前広場と京都タワー 10
 - 5-4. 京都駅ビル・烏丸小路広場 11
 - 5-5. 京都駅ビル・南広場 12
 - 5-6. 高瀬川のサクラ 13
 - 5-7. 芸術大学のサクラ並木 14

II. 国際シンポジウム「マイノリティ・まちづくり・民主と人権」

- 6-1. シンポジウムの概要 15
- 6-2. 後援のごあいさつ 16
- 6-3. 門川大作京都市長あいさつ 17
- 6-4. 基調講演・発表 18
- 6-5. パネルディスカッション 20
- 6-6. 黄徳福 TFD 執行長・閉会の辞 32

制作

NPO 法人京都景観フォーラム
七条通界わいプロジェクトチーム

連絡先

nnnet@mbox.kyoto-inet.or.jp

取材・編集

中村伸之※、辻野隆雄、牧野由起子
河合嗣生（渉成園の文と写真）

取材協力（敬称略）

西村 勇、小林達治（西七条村）
上村隆明、山内政夫（高瀬川）
西村良子（高瀬川の生け花）

※景観シミュレーション制作



七条通界わいの概念図

1. 東山・鴨川の自然を街へ

京都は「山紫水明（自然の景観が澄み切って美しい）」の地と言われている。鴨川から見る東山はまさしくそのイメージを代表する景観であり、七条通界わいでは山と川の自然が大きく接近する。

東山や鴨川を行き来する生きものたちは、七条通界わいの寺社仏閣・庭園・公園の緑を伝って、まちなかにもやって来る。

人工的な市街地でも京都駅ビル・緑水歩廊のような小さな自然をつくることで、隠れ家や中継地となって、生きものの多様性を守ることができる。里山が荒廃してゆく中で、実は都市こそ「ノアの箱舟」のように、生きものが生き延びることのできる場所であるとも言われている。

豊かな自然のインスピレーションが古今の文学・芸術作品を生み出した。京都市立芸術大学移転を機に、この地域の緑水環境の歴史と未来について考えてみたい。



京都駅ビル・緑水歩廊にはかつて巨椋池に生えていた水生植物が保全されている。



京都駅ビル・緑水歩廊にやって来たイソヒヨドリ。



東山から梅小路公園までたったの3km。鴨川からは1.8km。七条通界わいの緑でつながる。Google マップより。

2. 西七条村の面影

かつて、豊かな湧水があり、特産物のセリの田んぼがあったという西大路七条・かつての西七条村。地元の方へのヒヤリングから景観の変遷を探った。

まちなか緑化に取り組む西村勇さんによると「七条小学校の西側には大きなセリ田があり、湧水をポンプアップした洗い場から配水されていた。そこには3cmくらいのアジサバという淡水魚がたくさんいて、網ですくって遊んだ。1960年ごろからセリ田が減り、アジサバはいなくなった。」

西七条村村誌研究会の小林達治さんは「アルミを扱う建築金物の会社を起業したのは51年前、その半分は入社もせず、自分の好きな研究ばかりやってきた。」と、農村から住宅地・工業地区へと変わっていった地域について語ってくれた。



アジサバ（サバジャコ）は学名「ミナミトヨミ」。1960年代に絶滅した。地下水のくみ上げによる湧水の枯渇、過度の農業散布、圃場整備による生息場所の消失が原因と考えられる。（参考：京都府レッドデータブック 2015）



西七条村の面影を語る小林さん（左）と西村さん



小林さんに見せていただいた大正3（1914）年ごろの西七条村の絵図。西大路通は昭和初期の建設なので描かれていない。セリ田、藍田、クワイ田、竹藪などの緑水環境が描かれている。西七条村は大正7（1918）年に京都市下京区に編入された。



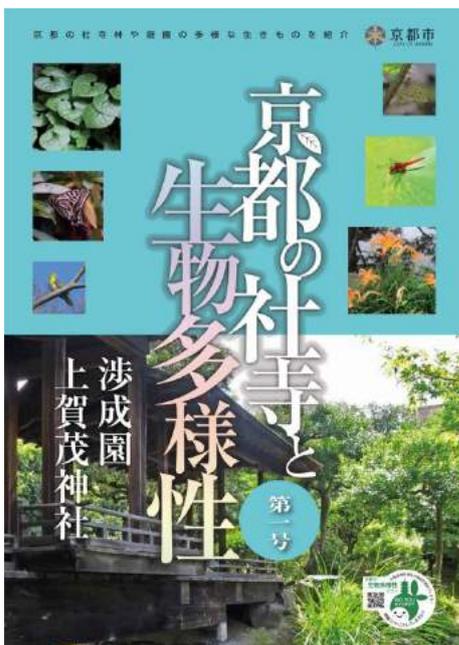
1946年、米国空軍撮影の空中写真（国土地理院サイトより）。西大路通や七条通には街路樹が植えられ、人家や工場の上にセリ田が残っている。西大路が蛇行しているのは若一神社のクスノキを守るため。

3. 渉成園の生きもの多様性

京都市内には、伝統的な土木技術・作庭技術によって人力で造られた多くの庭園があり、工夫と時間をかけ丁寧に造られたその水環境には眼を見張るものがある。そのような水環境を野生生物が見逃しておくはずが無い。岩石や植栽、護岸や水面は、自然環境の凝縮とも言え、生きものたちの生息環境であるからだ。これは「ビオトープ」そのものである。

京都盆地の中央には鴨川（加茂川・高野川）、西には桂川、南には宇治川が流れている。京都北山、丹波山地、比良山系・京都東山、湖南丘陵地、琵琶湖に通ずるこれらの水環境は、野生動物の移動の路になっている。中でも市街地の中央南北軸上に位置する下鴨神社、京都御苑、平安神宮、渉成園などの大規模庭園は、野鳥たちの駆け込み寺と例えられる。

京都市は2014年に、生物多様性保全の方向性を示す「京都市生物多様性プラン～生きもの・文化豊かな京都を未来へ～」を策定し、環境教育教材の『京都の社寺と生物多様性』第1号（渉成園・上賀茂神社）をまとめた。



『京都の社寺と生物多様性』第1号表紙

七条界わいでは、東本願寺・渉成園はまとまった自然を有する希少な場所である。別名「枳穀邸」と呼ばれ、カラタチ（＝枳穀）が多く植栽されアゲハチョウ類など昆虫の姿も多い。中央に配された印月池には、水生植物が豊かで、そこにはトンボ類やホタルなどの昆虫類をはじめ、水鳥も多く見られる。



印月池（いんげつち）ヒシ、スイレンなどの浮葉性、シヨウブ類などの抽水性植物が生える。



ナミアゲハ 幼虫はカラタチ（葉）を食し、成虫は庭園に植えられている花灌木の蜜を吸う。



アオモンイトトンボ（♂）抽水性植物の豊かな水辺に生息、小型のコオロギを捕食中。

外周部は高い樹木に囲まれ、植物種が多く、閉鎖～開放などの変化があるため、野鳥類の繁殖や越冬の適地となっている。池に連続する開放草地（芝生）では大型のトンボ類が飛翔し、環境の変化に弱く移動能力が弱いイトトンボ類も多く見られ、自然環境が豊かで安定したものであることを示している。

以前はブラックバスやブルーギル等の外来生物種も生息していたが、現在では駆除され、まったく見られなくなった。東本願寺と関係者が、希少な野生生物の生息場所としての役割を理解して維持してきたのである。

下京渉成小学校は渉成園を自然学習のフィールドとしている。「平成27年度 まちかど生きもの観察記」（主催：京都市）で、4年生がまとめた2つの研究成果が最優秀賞と優秀賞のダブル受賞をした。

地域の自然学習で庭園の価値はさらに高くなった。環境維持活動と環境教育への活用を継続することで、地域の誇りになると考える。



ギンヤンマ（産卵）開放水面を好む大型のトンボ



サルスベリ等さまざまな花木が植栽されている



『京都の社寺と生物多様性』第1号より（渉成園生きものマップ）

4. 高瀬川を歩く

2015年9月27日。「京都市立芸術大学を核とする崇仁エリアマネジメント」の「歴史・文化・景観ネットワーク」が高瀬川町歩き（五条通～塩小路通）を開催した。

<地域の方が語った歴史>

高瀬川は、401年前、角倉了以と素庵という息子さんが開削されて、京都の物価を約4割下げたという記録がある。その当時、最高の技術であった爆薬を使って開削をしている。これをやったときに、工事で亡くなられた方を弔うために建てた寺が、嵐山の大悲閣千光寺である。

角倉了以は代々お医者さんの家で、次男で、金融業をやり出して、その時代の流れにうまく乗って、ベトナムなどを朱印船で回っている。そのときの財を集めて土木工事を行った。

「菊浜」という地名の由来は、お東さん（東本願寺）におさめる菊を高瀬舟で運んで、ここで降ろしたから。

<高瀬川の特徴>

(1) 木の種類が多い。

自分のところの間口は、自分で管理するという習慣がある。戦時中は食べられるものを植えていたが、現在は趣味の木を植えるようになった。高齢化で管理できなくなったという悩みがある。また、樹木が大きくなったら、石垣をいわす（壊す）。

(2) ホテルが出る。※菊浜学区の自慢

今年はちょっとふえた。二条より上のみそそぎ川から、カワナをバケツ2杯もらってきてました。来年が楽しみ。鳥は10

種類くらい、アゲハチョウも来るし、ウグイスが鳴く。生物多様性で、育て方も生物多様性。自然に近い形になっている。

(3) 勝手橋

川にかかっている橋がたくさんある。散髪屋さんの前の橋は、店ができたころにかかった。小さいときは渡っていた。



<地域の方が語る町歩きの見どころ>



【01】梅乃湯

- ・日本一若い番頭さんがやっている。
- ・高瀬川音楽祭を開催する。



【02】遊郭

・昭和 33 年まで、いわゆる赤線があった。その当時より特徴のある建物が並んでいる。戦後はお茶屋として営業していた。

・京都の道は真っ直ぐ碁盤目なのに、ここは斜めになっていて、道路が迷路のようになっている。

・江戸時代は妙法院の寺領。寺が経営して、新地という遊び場にした。

上げて、景観が悪くなつてはかなわんという意見もある。



【03】仁丹の看板

・1つの角に4つの看板が集まっている。それだけ町が入り組んでいる。



【04】比叡山の眺め

・昭和 10 年に鴨川が氾濫した。上流の橋は木の橋だったので流れたが、七条大橋はコンクリートの橋だったので流れなかった。現在は、鴨川の底を 2 メートル低くして、石垣を上げている。人によっては、石垣を



【05】角倉地蔵

・サロン河米さんの寄付で建てられた。
・昔の人は、お金を儲けると、神社に寄付をしたり、信仰心の篤い人が多かった。
・ある本に「角倉地蔵」と書いてあった。

【06】源融 ※菊浜学区の自慢

・光源氏のモデル
・明石から水を持ってきて、塩を炊かせた。河原町を渡ったところに、塩竈町という名前が残っている。



【07】モミポン

・もみじおろしポン酢を販売。



【08】五条会館

- ・木造3階建て。大正4年に建てられた。2階に花道つきの舞台がある。3階はお稽古場。
- ・子どものころ、2階から外に向かって、くじ引きをした。（地藏盆の景品当て）



【10】なぞの記念碑

- ・ここで記念写真を撮ったと、市比売神社の神主さんから聞いたことがあるが、何の記念碑なのか誰も知らない。



【09】開化堂（手づくりの茶筒）

- ・小学校の同級生のお店。
- ・京都には、ちょっと行ったところに、日本一の職人さんがいたりする。



【11】任天堂本社

- ・子どもがゲームのネタを売りに行った。



【10】正面橋

- ・ひみつの桜名所（2014年4月撮影）

5. 緑水環境の未来を考える

京都市が策定した「京都市生物多様性プランー生きもの・文化豊かな京都を未来へー」（2014年）に、本市の「市街地の生態系サービス」が挙げられています。

①調整サービス

- ・雨水を一時的に蓄え、洪水を予防
- ・緑陰によるヒートアイランド現象の緩和

②文化サービス

- ・伝統的な祭り、文化を支える
- ・癒し効果
- ・散策場所や子供の遊び場の提供



③基盤サービス

- ・日照や湿度が異なる多様な環境の提供
- ・水辺空間の提供

そして「公園や社寺の林や庭園，町家の坪庭や路地庭など，によって管理された緑地や水域には，独自の生物多様性をみることができます。」と京都文化と密接に結び付いた緑水環境が評価されています。

この方向に沿って、七条通界わいの未来を考えてみましょう。

5-1. 京都駅ビル・空中経路

三山を一望する長いチューブ状の空中経路は、実にユニークな空間です。

駅の東西をつなぐことで、全体的な回遊性を高めています。機械的で冷たい印象です。風土に根差した「和の花」をそえることで、フレームの美しさが際立ち、柔らかな滞留空間が生まれます。



5-2. 京都駅前広場

駅前広場を雨水や湧水を貯留する「雨庭」として整備して、河川への排水の負担を減らします。水面がヒートアイランド現象を緩和し、貯留した水はヒートポンプの熱源として利用することもできます。

巨大な施設であるほど、環境負荷を減らす効果は大きいはずです。

かつてこの辺りには豊かな湧水を活かしたセリ田や藍田がありました。その原風景

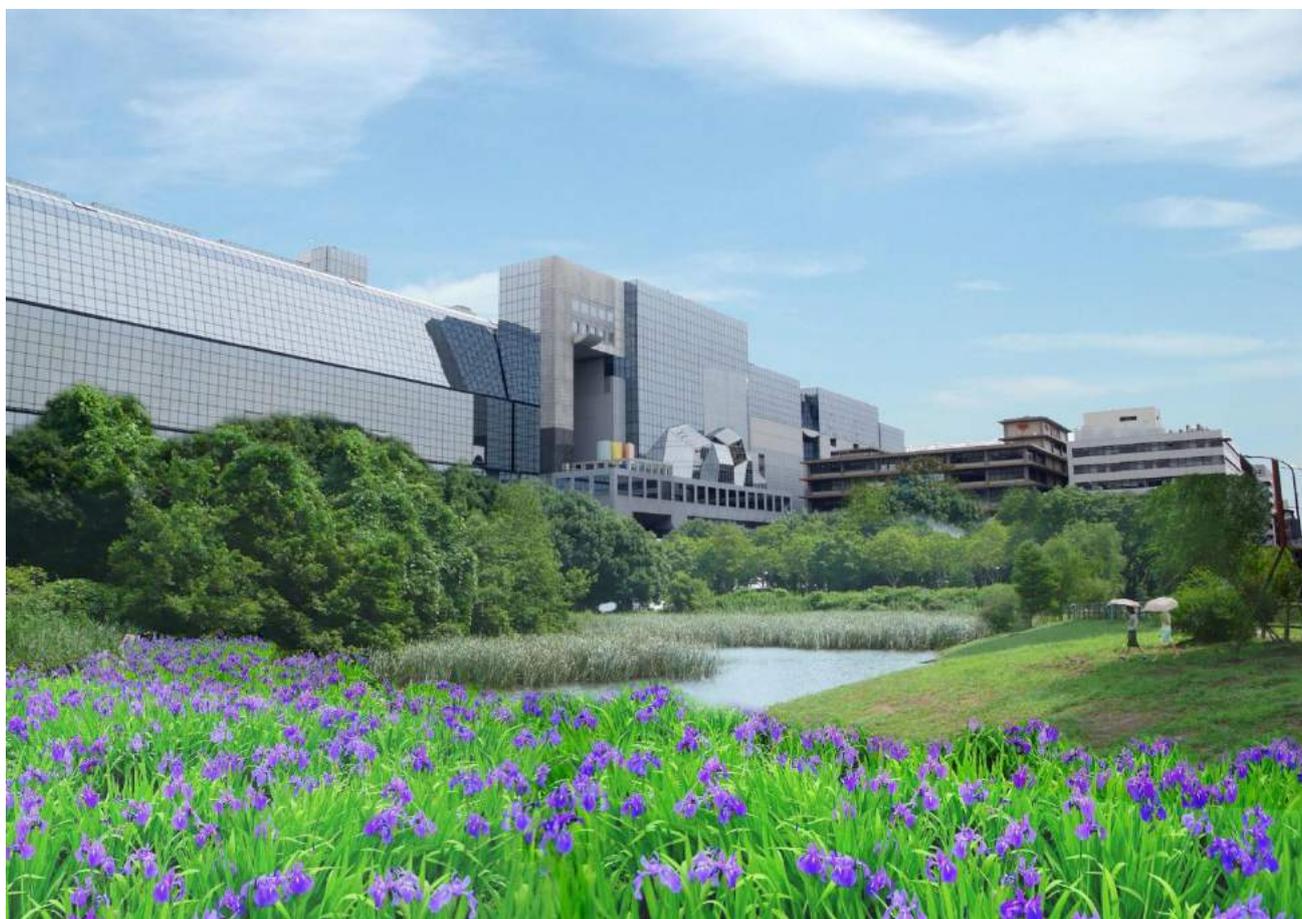
を参考に、セリや藍を栽培するのも一興でしょう。言うまでもなく、セリは食用で、藍は染料になります。

「初代駅舎は明治10年2月に建設された赤煉瓦のモダンな建物で、完成祝賀会には明治天皇も行幸されました。その建物は、「七条ステーション」と呼ばれ親しまれ、現在よりやや北側、現駅前広場あたりに建っていました。」（京都駅ビルHPより）

初代駅舎の写真

「京都府写真帖」（明治44年）「最近1か年の乗降客は三百三十万二千二百四十二人に達せり」とあります。

（国立国会図書館HP・近代デジタルライブラリーより）



5-3. 駅前広場と京都タワー

京都駅ビルも京都タワーも現代的な優れた建築ですが、伝統とは異質な景観であると思われています。

2つの建物が相對している駅前広場では、世界からの来訪者が京都タワーを背景に記念撮影をします。2つの建物が京都の玄関口の顔となっていることは否定しがたい事実です。

垂直に伸びるタワーと水平に広がる駅ビル。対照的な2つの建築を緑水の広場でつなげば、物語性のある、象徴的な景観となるのではないのでしょうか。

都心部でも樹林と水面の多様な組合せがあれば、渉成園のような生きものの居場所が生まれます。四季折々の和の花と象徴的な建築の風景が、新しい京都の顔となるでしょう。



5-4. 京都駅ビル・烏丸小路広場

烏丸小路広場は開放感のある背の高い吹き抜け空間で、駅によって分断された歴史ある烏丸通を象徴的につなぎます。さらに京都タワーを望む優れたビューポイントですが、北面して暗く冷たい印象があります。このような環境は、例えば北山の谷の植生を参考に緑のデザインをすればいいかもしれません。

駅ビルには、実は優れたビューポイント

とワクワクするような回遊の仕掛けが隠されています。それぞれの空間を柔らかな自然素材で包み、京都の地形に見立てて郷土の樹種で緑化し、ルートづくりをすれば、京都の自然を巡る現代的な「回遊式庭園」となるでしょう。

親しみとにぎわいが生まれ、異質とされていた建築が自然とまちに溶け込んでゆきます。



京都駅ビル・緑水歩廊は、上から順に、京都の里山・棚田・湖沼の植生を再現している



5-5. 京都駅ビル・南広場

2013年、京都駅ビル・緑水歩廊にフジバカマを展示したところ、アサギマダラが飛来しました。人工的な現代建築でも環境が整えば、自然のネットワークにつながります。

京都駅から東山の緑まで約2km、梅小路公園、鴨川、渉成園は1km圏にあります。台湾まで2000km以上の渡りをするアサギマダラにとっては大した距離ではありません。



まちなかに和の花のある小さな居場所がたくさんあれば、チョウが飛び交う景観も夢ではないでしょう。

公益財団法人京都市都市緑化協会は、かつて暮らしの中で利用され、親しまれてきた和の花を育て守るプロジェクトを進めています。

その対象となる京都ゆかりの和の花はフジバカマ（キク科）、フタバアオイ（ウマノスズクサ科）、ヒオウギ（アヤメ科）、キクタニギク（キク科）、オケラ（キク科）、キキョウ（キキョウ科）などです。



フジバカマにとまるアサギマダラ
(Wikipedia より)



5-6. 高瀬川のサクラ

菊浜学区の高瀬川（五条通～七条通）は知られざるサクラの名所です。和の花が咲く低木を植えて、川面で生け花のイベントをする風景を考えました。

菊浜という地名は、お東さん（東本願寺）に菊の花を運んだ歴史に由来するので、花のイベントはぴったりです。

近年この地域では「高瀬川まつり」「灯笼流し」「花回廊」「高瀬川音楽祭」「菊

浜花灯路」が開催されて、緑水環境づくりが盛んになってきました。

紅葉も美しい。



2014年5月、元・立誠小学校前。華道家・西村良子さんに作品の写真を提供していただきました。



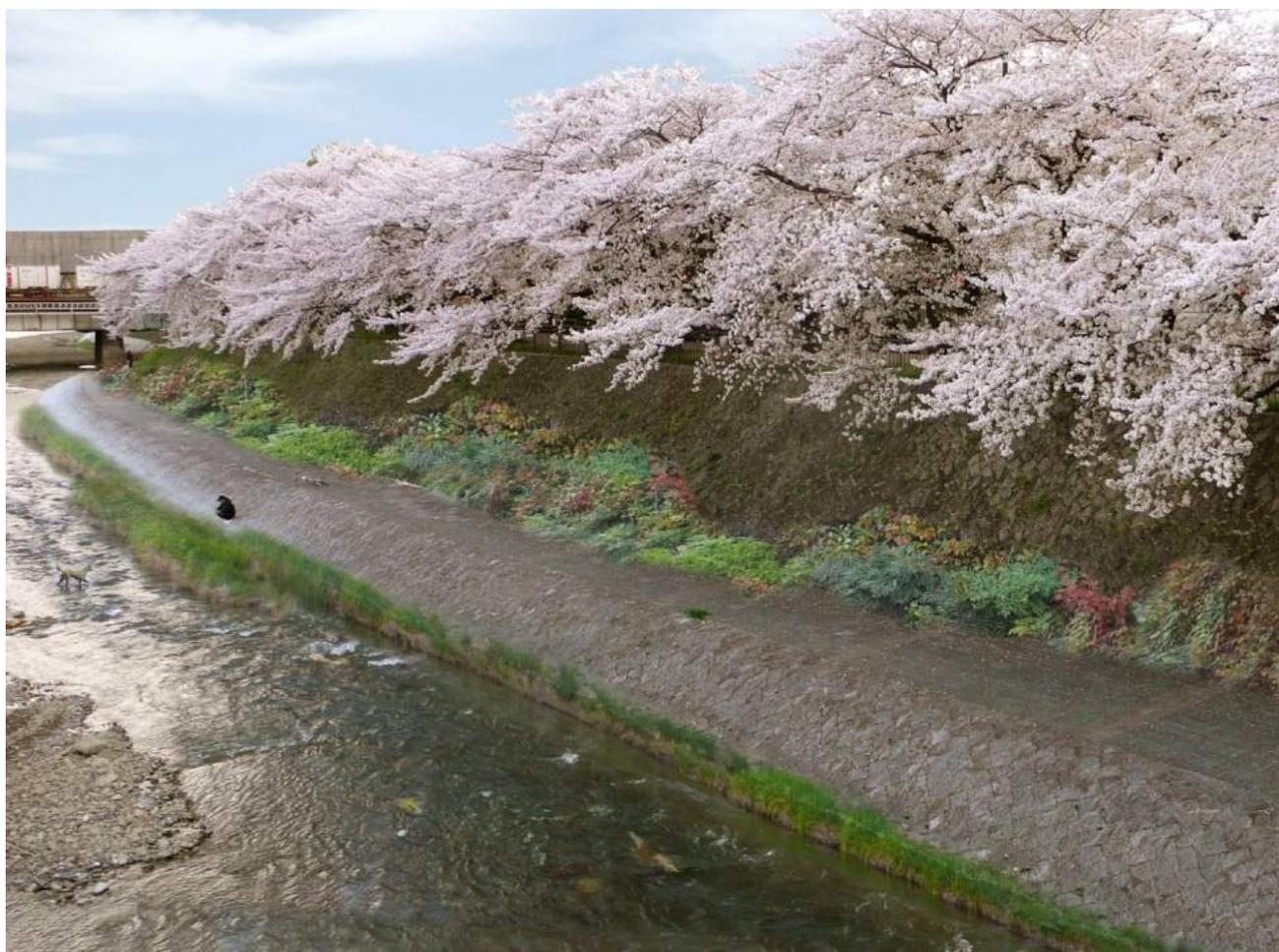
5-7. 芸術大学のサクラ並木

見事なサクラが咲く鴨川の岸辺には、京都市立芸術大学が移転します。塩小路橋から身近に眺める「芸術大学のサクラ並木」が桜名所に加わることになるでしょう。

なお、以上のシミュレーションは公共性の高い都市空間を対象としています。その公共性を鑑みて、環境や景観のあり方を自由研究したもので、現実のプロジェクトに基づいたものではありません。



岸辺はサクラのトンネルになる



6-1. シンポジウムの概要

第1回 TFD 日台民間交流国際シンポジウム
in KYOTO

「京都市立芸術大学移転を機に“マイノリティ・まちづくり・民主と人権”を考える」

- 日時：11月27日（金）基調講演
11月28日（土）シンポジウム
- 会場：（27日）東本願寺枳殻邸（渉成園）
（28日）故郷の家・京都（東九条）

「シンポジウムの開催について」

本シンポジウムは TFD・財団法人台湾民主基金会の発意により開催し、民主的な社会におけるマイノリティの問題を、国際的な視野の中で比較・討論し、差別的な構造の克服、アイデンティティの継承と創造、多文化共生まちづくりのあり方について考えるものである。

京都では、長い歴史の中で多様な文化が共生し芸術的創造が花開き、都市景観が洗練され都市ブランドが高められてきた。

2014年、京都市長・門川大作氏は歴史的に差別と闘い続けている地域に、京都市立芸術大学を移転する事業を発表した。これは、人口の減少や高齢化に悩むマイノリティ社会を政治・経済面のみならず、文化・芸術面からも再生させる画期的なプロジェクトである。

一方、台湾においては1980年代以降に目覚ましく民主化が進展し、自らのアイデンティティを問い直す中で多文化主義が打ち出された。存在感を増した原住民族の文化の保護と継承が、近年では東南アジアからの移民社会との共生が重要な社会的課題となっている。

お互いの社会的課題を見つめ合い、異文化間のコミュニケーションを豊かにする芸術にも光を当てたシンポジウムにしたいと思う。

シンポジウムディレクター
NPO 法人京都景観フォーラム
中村伸之

■主催（主辦）

TFD・財団法人台湾民主基金会
（財団法人台湾民主基金会）
NPO 法人京都景観フォーラム
（NPO 法人京都景観論壇）

■共催（協辦）

崇仁まちづくり推進委員会
（崇仁社區營造推進委員会）
東九条CANフォーラム
（東九条CAN論壇）
京都市立芸術大学
（京都市立藝術大學）
都市環境デザイン会議（JUDI）
（都市環境設計會議・JUDI）
台湾・東海大学日本地域研究センター
（東海大學日本區域研究中心
「第五屆日本研究論壇」）

■後援（支援）

京都市
東本願寺
社会福祉法人こころの家族 故郷の家・京都
（社會福利法人心的家族 故鄉的家・京都）

基調講演・シンポジスト

主題發言人 - 研討會參與者

日本

雨森慶為 Amemori keii
（東本願寺解放運動推進本部）
井上明彦 Inoue Akihiko
（京都市立芸術大学教授）
小林明音 Kobayashi Akane
（NPO 法人京都景観フォーラム事務局長）
高間エツ子 Takama Etsuko
（滋賀沖繩県人会）
寺川政司 Terakawa Seiji
（近畿大学准教授）
中村伸之※Nakamura Nobuyuki
（NPO 法人京都景観フォーラム理事、JUDI）
西村良子 Nishimura Ryoko
（華道家、高瀬川会議代表）

朴 実 Paku Shiru

(東九条 CAN フォーラム代表)

藤戸ひろ子 Fujito Hiroko

(ミナミナの会)

藤本英子 Fujimoto Hideko

(京都市立芸術大学教授、JUDI)

松島泰勝 Matsushima Yasukatsu

(龍谷大学教授)

山内政夫 Yamauchi Masao

(崇にまちづくり推進委員会 事務局長)

尹 基 Yoon Kee

(社会福祉法人こころの家族 理事長)

淀野 実 Yodono Minoru

(京都市総合企画局 局長)

(五十音順)

台湾

黄德福 Teh-Fu Huang

(臺灣民主基金會執行長)

陳張培倫 Pei-Lun Chen Chang

(原住民族委員會 政務副主任委員)

陳永峰※Yung-Feng Chen

(東海大學副教授日本研究中心主任)

官大偉 Da-Wei Kuan

(國立政治大學民族學系副教授)

蔡志偉 Chih-Wei Tsai

(國立台北教育大學文教法律研究所副教授)

廖朝明 Chao-Ming Liao

(國立臺灣師範大學政治研所博士)

阿布・卡斐阿那 Mei-Hui Chiang

(至善基金會達卡努瓦工作站站長)

亞弼・達利 Yapit. Tali

(至善基金會新竹工作站主任)

戴明雄 Ming-Hsiung Tai

(新香蘭長老教會牧師)

鍾文觀 Wun-Guan Jhong

(花蓮縣部落大學執行長)

※シンポジウムディレクター

(研討會策劃人)

6-2. 後援のごあいさつ

雨森慶為先生(東本願寺解放運動推進本部)

元治元年(1864)の蛤御門の変によって東本願寺が全焼し、この枳殻邸も燃えてしまいました。最初に消火活動を行ってくださったのが、皆さんが今日見て廻られた七条部落の方々をはじめとする、京都の被差別部落の真宗門徒の方々です。命を賭けてたいへんな消火活動を行っていただいた、当時の六条村とわたしたちとのつながりを感じる事です。



尹基先生(社会福祉法人こころの家族理事長)

ここにアジアから来る留学生ハウスができれば、アジアから介護福祉を学ぶ人が集まる所ができれば「故郷の家」は100%完成だと夢見ています。そのような夢を地域の皆さんと手をつないで、心を結んで、一生懸命やっていきたいと思っています。

本日の台湾と京都のシンポジウムの理念が両国のみならず地球村の隅々まで広がる事を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。



6-3. 門川大作京都市長あいさつ

みなさん、こんにちは。台湾からお越しの皆さん、ようこそお越しいただきました。京都市民を代表して、心から歓迎いたします。TFD（財団法人台湾民主基金）・NPO 法人京都景観フォーラム・崇仁まちづくり推進委員会・京都市立芸術大学・地域の多くの皆さんの熱意によって、こういった会が開催されることを市長として、また一人の市民としてもとてもうれしく、心強く思っています。関係者の皆さん、お集まりの皆さんに御礼申し上げます。

京都は長い歴史を誇っていますが、さまざまな差別・偏見がありました。部落問題は大きな課題でした。いや、過去形にしてはいけなかもしれません。この地区は在日韓国朝鮮人の方々がたくさん住んでおられました。そうした方々に対する、言われ無き差別がありました。それに対して主体的に闘い続けて、大きな改善も見られてきています。しかしさらにこれから、あらゆる差別をなくす、そういう取り組みをしていかなければならない決意を新たにしているところです。

崇仁地区に京都市立芸術大学が移転する、これも大学関係者が総意をもって崇仁地区に行きたい、また崇仁地区の方々があらゆる努力をして、早く大学が来るように協力したい、こういう関係が生まれてきています。本当に10年前には考

えられなかった、大きな前進です。この「故郷の家」でこういう会をしていただく事もうれしく思います。

崇仁地区に芸術大学がやってきたら、次にこの東九条地区全体も文化芸術で発展するのではないかと感じています。長年に亘って、差別の無い社会を造るために闘ってこられた、その拠点文化芸術で多くの人が学び、交流し、そして世界の人々の幸せ、さらに世界平和のために活躍される人を育てる拠点になる、そういう事を考えるとワクワクしてくる今日この頃です。

私の父は102歳で亡くなりましたが、戦前に崇仁小学校の教壇に立った経験があります。私と部落問題との出会いは父の経験からでした。それから70～80年という歳月が経って、そして多くの方々の、差別をなくすために血のにじむような努力の結果、今がある。しかしまだまだ課題はあります。共々に頑張ってまいりたい、そんな決意を新たにしています。

この国際シンポジウムが今回だけで終わらずに、2回3回と続けていただいて、そして台湾と日本・京都、朝鮮半島と日本・京都がもっともっと交流して、世界の平和に貢献できる、そんな東アジアを作っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございます。



6-4. 基調講演・発表

(1) 基調講演

1. 松島泰勝（龍谷大學教授）
「琉球独立—差別からの解放を求めて」
（琉球獨立：從歧視中追求解放）
2. 陳張培倫（原住民族委員會政務副主任委員）
「台灣原住民族的權利與政策發展について」
（台灣原住民權利與政策發展）



松島泰勝先生



陳張培倫先生

(2) 発表1「日台マイノリティが直面する政治・経済問題」

（日台少数民族群之政治經濟問題）

1. 山内政夫「京都市におけるマイノリティーのまちづくり ～地域運動の立場から」
（京都市少数民族群的社區營造——從地方社區運動的立場出發）
2. 淀野実「京都市におけるマイノリティーのまちづくり ～行政の立場から」
（京都市少数民族群的社區營造——從地方行政的立場出發）
3. 高間エツ子「私は在日・琉球人！」
（我是在日本的琉球人！）
4. 蔡志偉 Chih-Wei Tsai「從兩人權公約建構原住民族法與權利：文化完整性」
（国連の人権条約から原住民族法と權利を構築する—文化の統合性を中心に）
5. 廖朝明 Chao-Ming Liao「宜蘭縣的生態環境、政黨與泰雅族關係--人權兩公約的視角分析」
（国連の人権条約からみた台湾・宜蘭県の生態環境、政党とタイヤル族との關係）
6. 戴明雄 Ming-Hsiung Tai「原住民族部落文化的重建與再生」
（原住民族部落文化的再建と再生）



山内政夫先生



高間エツ子先生



蔡志偉先生



廖朝明先生



戴明雄先生



官大偉先生



(3) 発表2 「日台マイノリティの文化・アイデンティティの可能性」

(日台少数民族群の文化與認同)

1. 朴 実「東九条マダンに託す願い」
(託付於東九條廣場的願望)
2. 井上明彦「社会の<孔>としての芸術」
(作為社會《祕徑》的藝術)
3. 阿布嬌. 卡斐阿那 Mei-Hui Chiang
「“Kanakanavu 族” 的正名之路」
(カナカナブ族の「名を正す」道のり)
4. 亞弼. 達利 Yapit. Tali「文化權：從部落 TAYAL 單一部落到跨部落的工作模式」
(文化權—「部落 TAYAL」の單一部落からトランス部落の仕事スタイル)
5. 鍾文觀 Wun-Guan Jhong
「終身教育體系下原住民族文化權之實踐：以花蓮縣原住民族部落大學為例」
(生涯教育における原住民族文化權の實踐—花蓮縣原住民族部落大學の例を中心に)

アイヌ民族の古典舞踊 (愛奴人的古典舞踊)
 藤戸ひろ子 (ミナミナの会) (大家之會)



朴 実先生



井上明彦先生



阿布嬌. 卡斐阿那先生



亞弼. 達利先生



鍾文觀先生



藤戸ひろ子先生



小林明音



寺川政司先生



陳永峰先生



中村伸之



西村良子先生



藤本英子先生



6-5. パネルディスカッション

●パネルディスカッション1

「日台マイノリティが直面する政治・経済問題」

コーディネーター：陳永峰（東海大学副教授）
／中村伸之（NPO 京都景観フォーラム）
コメンテーター：官大偉（国立政治大学民族学
系副教授）／寺川政司（近畿大学准教授）
パネリスト：戴明雄（新香蘭長老教会牧師）／
廖朝明（国立台湾師範大学政治学研究所博士）／
蔡志偉（国立台北教育大学文教法律研究所副教授）
／高間エツ子（滋賀沖繩県人会）／淀野実（京都市
総合企画局局長）／山内政夫（崇仁まちづくり
推進委員会事務局長） <敬称略>

寺川：部落のまちづくりの場合、例えば当事者運動が進展して、社会的責任を追及し、行政に対する要求型闘争がなされてきて、そして事業を獲得した、という地域まちづくりの流れに持ってきたのですが、それはある意味、画一化した動きになってしまったのではないかと。その中で周辺からの反感を生み出したり、次の展開になかなかうまく進めなかったり、いろんな問題を抱えだしている。その中で、行政も地域も自立していく、自立型・提案型の運動に変化してきた、というお話でした。それについて伺いたいのは、多様性というか、アイデンティティというか、自尊感情というか、差別の持っているテーマと多様性はつながっていくものなのか？ 逆に言うと差別と偏見は多様であれば無

くなっていく可能性があるのか？ それに踏み込んでお話を伺えれば、と感じました。

在日琉球人というご報告をいただいた高間さんに関して、質問といいますが、これからの世代にどのように思いを伝えていくかはとても大事じゃないかと思うんですが、それについて伺いたいです。やはり多様性・アイデンティティ・自尊感情がどのように、次のマイノリティの差別・偏見をなくすきっかけになるのかがポイントだと感じています。

官：皆さんといくつかシェアしたいと思います。私は政治大学で民族学のフィールドワークの授業を持っています。毎年夏になると学生を連れて調査に出かけます。ある年、学生と部落に行きました。ちょうど豚を殺す儀式に出会ったのですが、学生たちは「見に行こう」と言います。現場に着き、その場面を目にすると学生は怖くなって、キャーと叫び出し、顔が真っ青になりました。若い人たちは死が怖いものだ実感したようです。

狩をする原住民では、狩が上手い人は人徳の高い人が多いんです。狩に出かけると動物の命を奪うことになりまますので、狩猟とは高貴な仕事だと思っています。私たちの文化の中では、死に直面することは厳粛なことです。

日本社会における部落の人々が動物の死を扱う仕事のために差別を受けている事は聞いています。それは社会の人々が死に対して怖れを持っているからではないでしょうか。そこから距離を取っていこうという心の反応の現れです。



どのようにして生命の哲学を社会に認知させればよいのでしょうか。やはり芸術が死に直面する勇気をもたらしてくれます。京都市立芸術大学が同和地区に入るのはとても喜ばしいことです。芸術の持つエネルギーとパワーが人々の心を、死に対する恐怖から解放してくれます。



台湾では原住民は大きな役割を果たしてきました。人口そのものは多くなくても文化の多様性、原住民の土地との密接な関連など、原住民の運動は原住民だけのテーマではありません。それは台湾全体の社会に多様性をもたらし、命に対する哲学、土とのつながりを豊かにしてくれています。

日本の部落の人々が持っている文化やノウハウは日本にも多様性をもたらしてくれると思います。

いくつかお聞きしたいことがあります。

まず山内さん、崇仁地域の歴史の経験・文化的ノウハウは京都の歴史においては「もしこの地域の歴史が無ければ今の京都は無い」というほど何らかの影響を与えているのでしょうか？

陳：山内さんの報告は非常に具体的に、部落民の差別について問題を提起していますね。近代化以降の、死を恐れ忌避する文化に対して問題提起をしています。

また淀野さんは行政の立場から、崇仁地区の問題について非常にはっきり言っておられますね。高間さんの語る琉球問題は、山内さんの語る部落問題と異質ですね。元々、琉球は自分の王国を持っていて、アメリカ占領下の経験もあり、今の台湾の少数民族も同じ問題を持っています。以上の点について回答できれば、お願いします。最初は山内さんから。

山内：今の質問にお答えします。今から30年位前に京都部落史研究所が、部落の歴史に光を当てたんです。今まで判らなかったことがたくさん判ってきた。一つは、部落の人が死刑執行場所で首を切るとか、そういう事をどう考えるか、という事ですね。つまりわれわれの先祖は動物や人間の身体の仕組みについて知っているというので、杉田玄白が人体解剖をした時、実際にメスを握ったのは部落の先祖です。「これが心の臓、これが肺の臓、これが胃」と。それを杉田玄白は詳しく記録した。つまり、われわれの先祖が、近代医学にとっても大事な、人間の身体をそのまま仕組みを見せるという、それまでタブーであった事をやった。なぜ今までタブーであったかといえば、人の死に直接接触することができるのは部落民だった。穢れに対して、自らの身をもって清める、という意味がある。今までの常識では考えられない文化的・医学的な功績、これは社会にとって非常に大事な出来事だと、われわれの研究で判ってきました。



官：淀野さん、行政の立場から、公共施設・インフラの整備の他に、文化的な重要性・歴史的記憶の角度から、崇仁地域に対して何らかのまちづくりの特徴を生かしていく方策はありますか？

淀野：ご質問が、同和行政においてインフラ整備以外に文化政策があったのか、という主旨かと思いますが、確かに当初の同和行政というものが、いわゆる劣悪な生活環境のレベルアップ、著しく劣っていたレベルを上げていく、同一水準に持っていくという、これは先ほどの寺川先生の「画一化」という問題提起と一致するんで

すが、まずは追いつくためのインフラ整備に力を入れていきたいというのが事実です。



その中で地域独自に、自分たち地域の歴史を見つめ直し、例えば山内さんは崇仁において明石民蔵という人物がたどってきた歴史をまちづくりにおける功績を掘り起こし、その拠点となっていた柳原銀行の建物が人権啓発の展示施設に転用され、開放されたということがあります。

また現在も続けていますが、京都は水平社発祥の地で、「水平社宣言」の現物を崇仁自治会が所有しており、これを世界記憶遺産に登録する運動を続けておられて、これは地域だけが運動するのではなく、市議会もそれを決議して進めていこうというバックアップもあったということです。

それ以外に特徴的な話は、同和地区の生活相談をやっている隣保館という施設がありました。これは京都市直営の施設でしたが、それをNPOに管理委託していく中で、地域で活動されているNPOが地域の歴史文化の掘起しを進めて行ったということです。例えば吉祥院では六歳念仏、それぞれ地域で持っている伝統文化・歴史を自分たちのまちづくりの武器にしていくという展開をし、行政もそれを支援していくという形で進めてきました。

官：高間さん、お話を聴きながら、琉球はハワイに似ていると思いました。同じような歴史を持っています。ハワイの独立運動も高まってきており、国際裁判所にその訴訟が起こされています。日本の琉球人の間において、その高まりがあるのでしょうか？ 日本国内のみならず、海外に向けて発信する予定はありますか？

高間：以前の沖縄県知事である西口さんに、本島の全国紙の記者が「沖縄の心とは何ですか？」

と尋ねると、「日本人になりたいともなれない心」と答えたのは沖縄では有名なんです。その気持ちは私も日頃から持っています。やはり日本人になりたいけれど、その気持ちが起きない現状が日本にも沖縄にもあるということですね。沖縄が置かれている立場に、一緒になって働き、伝えていくことができないままで、一方的に沖縄だけに基地が来て、自分たちが遠いところにおいて傍観している状況であれば、「同じ日本人です」というわけにはいかない、という気持ちがあるんですね。

「ヘイトスピーチは琉球人に対してあるのか？」と訊かれますが、現実にあります。2011年、前年の沖縄でのオスプレイ配備に、今の県知事の翁長さんをはじめ、たくさんの政治家が国会まで出向いて「配備を撤回してほしい」と要請行動をしました。道路の向かい側にいた日本人たちにより「売国奴！」「日本から出て行け！」というヘイトスピーチが行われたにもかかわらず、警備していた警官は無視、周りにいた人たちも聞かんふりで、たいへんショックを受けて帰ってきた。そういう人たちに対してどういふうに沖縄の現状を伝えていくか、というのも一つの課題です。まず、琉球沖縄の歴史を知っていただく草の根運動しかないなと思っています。

私たちの時代というのは、植民地時代に育った世代ですけれども、40代以下は復帰して日本人だという意識が半分、「ウチナンチュー」琉球人という意識が半分あります。そういう子供たちに対して、教育の中で琉球沖縄の歴史が徹底して教えられていなかったという現実もありましたので、そういう若者に対してもキチンと



歴史を学ぶ機会をたくさん作っていきたくと思います。今、学校においては「エイサー」という、太鼓を持った踊りを共有してくださる学校もありますので、そういうものを使って皆さんに発信していきたくと思っています。

陳：ありがとうございます。「琉球人は日本人になりたくてもなれない」というのは印象に残る言葉でした。在日韓国朝鮮人にもつながる言葉だと思います。部落には日本人でありながら主流社会に受け入れられない日本人もいます。台湾の原住民においてはどのような状況でしょうか？ 原住民は台湾人に含まれるのでしょうか？ 言い方を変えれば、原住民は、自分たちは中華民族に含まれると考えているのでしょうか？ 「なりたけれどなれない」という思いは同じなのではないでしょうか？



戴：台湾の原住民は、植民地時代を経て今まで、なかなか自分たちの位置付けが判りませんでした。なぜなら、それぞれの文化・言語を持っていますが、それぞれのエスニックグループが住んでいる領域・空間・範囲を越えず、他民族に関わりませんでしたから。

しかし植民地時代とその後の国民党政府、その2つの政府に統治管理を受けた影響は大きく、教育・軍事・土地制度・民族発展などの面においても非常に深い影響を受けたのです。他にも日本から直接的な影響があります。台湾の全体的な環境、天然資源や民族、日本はすべてにおいて強烈的な統治手段で掌握しようとしてきました。

1874年には日本政府の台湾出兵があり、

1895年に（日清戦争の結果）日本は清から台湾を受け取ったわけです。「ハナ子」「キク」「タケオ」という日本人のような名前の方がいます。日本との関係は非常に深かったわけです。

われわれの世代になりますと国民党政府の影響を受けて中国語になりましたが、原住民のアイデンティティを求め、言葉を取り戻そうとしています。原住民は元々そこに住んでいたのに、今までないがしろにされてきたと主張したいわけです。「台湾人」の中に原住民も入れられているのでしょうか？ 「台湾人」を自称している漢族は原住民を台湾人と見なしていません。「台湾語」は「ピンナン語」です。台湾人・台湾語にはもっと広い意味での、16のエスニック民族、42の言語すべてを含まねばなりません。台湾人＝台湾国でしょうか？ これは民族自治・独立を主張する時に大きなプレッシャーです。半分以上の人は「自分は中国人」だと思っています。

中国人であれ台湾人であれ、実は元々原住民が住んでいた事を無視してはいけません。原住民の服飾文化などを紹介して、民族・文化の存在をアピールしたいわけです。今までないがしろにされてきた存在価値をもっと強調しなければなりません。そのための重要な資産です。

台湾の文化とは何でしょうか？ 原住民の文化です。台湾を象徴しているのは原住民を含めた多様性のある文化です。400年の歴史を経て、漢族と台湾人との通婚の比率が高まっていますが、多くの人たちは自分たちが原住民である事を認めていません。





廖：原住民は最初から台湾に住んでいた者と認められています。しかし原住民以外に多くの移民がいる。17世紀にオランダ、次にスペイン、その後日本、1949年には国民党が台湾に来た。こうした国々が台湾を統治してきました。

民主的な政治の発展という意味では台湾は進んでいます。人々の思想の面では開けていると思います。民主的な政治の中で「誰が台湾人か？何を持って台湾人とするのか？」という議論が起こっています。台湾の原住民は元々そこに住んでいた最初の住民なのだ。もし将来、中国と台湾が「中華人民共和国」になった場合（私たちは反対ですが）、政治によってまたわれわれが無視されてしまう恐れがある。原住民こそが台湾を代表する民族にもかかわらず、政党の政策によって私たちの立場が変わってしまう。

文化人類学・政治学・国際関係学・法学などの立場から研究する先生がおられます。原住民を研究するのは世界の潮流になっています。原住民は注目されています。しかしその人口は全人口においては非常に低い割合だという事実もありますので、権利を得るにはまだまだ弱い立場にあります。われわれの本来の権利を実現するにはまだまだ時間がかかるでしょう。しかし原住民が元々の台湾の民族だという意識は変わりません。このステージ上も、下におられる皆さんも、原住民が権利を守り、支持を得られ、自分たち本来の生活が得られるように、発展していくことを願っていると信じています。

蔡：いくつか感想を述べます。

台湾のこれまでの歴史を見ますと、原住民は特別な（非主流の）存在でした。日清戦争で清が負けたのでこの島を日本に捧げました。そのプロセスにおいて、島の住民の意見に耳が傾けられたことはなかったのです。原住民は日本統治の様々な問題を仕方なく受け入れた。この島の政治的な事件は原住民とは関わりのないところで行われてきました。

もう一つ申し上げたい。「族」というのはどういう定義でしょうか？この概念について考えますと、原住民が「族」であるのは既成事実ですが、この事実はいつ確認されたのでしょうか？ある国もしくはある政府がそのコミュニティの存在を認めた時だと思います。

台湾の政策は原住民に大きな影響を与えています。植民地時代は、原住民と認められるためには、まず日本政府から発行された戸籍謄本の提出が必要でした。現在の原住民の土地も、日本の統治者が区分したもので、そのまま今に至っています。

それでは、原住民の概念とは何でしょうか？私個人の考えでは、「私は私」これが基本です。「何族」とか、「どこの国」とかは、後から付いてきたものです。

朴：台湾と日本では「民族」の定義は若干異なるようですね。日本政府は人口統計では国籍で、例えば韓国籍・朝鮮籍だったら「在日コリアン」と定義付けているんですね。ところが現実では、例えばコリアンと日本人の結婚は非常に多くて、若い人のほぼ9割近くは日本人と結婚するんです。日本政府は産まれてきた子供を最初から日



本人と決めて、学校教育をするんです。本人たちにしてみると、どちらでもない、日本でもない、コリアンでもない、私たちはそれを「ダブル」と呼んでいます。日本と台湾には民族の定義に違いがあって、私たちも戸惑っていて、今後どんどん増えていくダブル、ハーフ、クォーターなど次の世代、その次の世代になれば私たちはどのように捉えていけいいのか、今後の課題と思います。

中村：ちょっと訊きたいんですが、民族と国籍は分けられないんですか？

朴：私の中では、民族は民族、国籍は国籍、と捉えているんですが、特に在日コリアン、また多くの日本人は「国籍＝民族」という捉え方が非常に強い。実は私は日本国籍を取っているんですけど、当初は同胞社会から「裏切り者」と言われて、コミュニティから追い出されたこともありました。でもそうではないんだ、と訴え続けているんです。

陳：在日コリアンは、他人の土地に住んでいる。でも台湾の原住民は、統治者は外から来たものです。その国籍と民族のつながりの認識は異なるわけです。

**：お三方にお聞きしたいのですが、私は、日本では部落民は結婚・就職も差別されてしまうということを知っています。台湾では、就職の面で差別してはいけない、と法律で定められています。日本ではそのような法律はあるのでしょうか？

山内：結婚に対する差別はまだ根深くあります。日本の社会は家と家が結婚する、ということなのです。時には親戚一同を興信所が調べて、部落出身であることが明らかになれば、ご破算になることもあります。就職差別も15年くらい前にはあったんですが、今はほとんどありません。それを規制する法律はありません。運動をする

人は見解を述べて、自らが解決すべきかと思えます。差別規制の法律を作っていこうと、ずいぶん昔からやりましたが、今のところは成立していない。これからもこの論議はあるでしょうね。

**：禁止する法律は山内さんが述べられた通りで、これは心の内面の問題ですので、これが差別かどうかを政府や行政が判断するのはちょっと難しいと思います。一方で差別の実態があるのは間違いありません。ただその時に、その差別をどう見るかなんですが、ことさら差別を強調することが解決につながるのか？ という視点もいると思っています。「差別はダメ」と強調するあまりに、逆に心の中に深く浸み込んでいく事にもなりかねない。理想的な形は、例えば差別の落書きがあったとしても、その行為がバカな行為である、みんなが「こういう行為はおかしいのだ」という認識で捉える、そういう状況になれば差別意識は少なくなっていくのではないかと考えています。

山内：われわれ崇仁自治連合会と柳原銀行記念館が「全国水平社宣言」をユネスコ世界記憶遺産に、2年続けてエントリーしたんです。今回は16の団体が手を挙げましたが、まだ決まっていない段階で、ある国会議員が地元に戻って「ユネスコの国内推薦に通った」と言った事があった。非常に政治的なものを感じています。そういう意味で、3回目の登録申請には政治的な事も考えなくてはならない。中国の南京大虐殺の資料が登録され、従軍慰安婦も登録されて、日本の政府はユネスコの登録のあり方について



「不透明だ」と抗議していますが、日本政府こそ不透明な事があるのです。近々、世界記憶遺産の会議があるので、それで判断を考えていきたい。そういう問題も孕んでいる。

私個人的には、結果は落選しましたが、ユネスコ世界記憶遺産が政治的な判断をするものなら、権力に媚びてまで申請しなくていいのかな、と思ったりしています。



中村：それでは最後に寺川先生と官先生にまとめをお願いしたいと思います。

寺川：次の第2部につながる話ですが、マイノリティの課題として、政治的にも経済的にも問題を抱えており、それが持つ可能性は多様性にあると思うんです。誰からどう見られているか、どうしていくか、という次の行動におそらく展開していくと思います。文化も歴史も生活そのものもそうですが、マイノリティをマイナスのイメージで見る時代から、多様化の時代になって価値が増していく、周りの気付きのあり方で、社会政治的な動きにつながっていくのではないかと考えています。

官：台湾には特殊な歴史がありますので、国際社会での立場の確保が難しい。1995年に中国との間で第三次台湾海峡危機がありました。ちょうどスイスでの国連の原住民会議に参加しましたので、そこで中国に抗議をしたわけです。これは一つの例に過ぎません。台湾が独立の道を歩むには原住民の力を借りなければならないわ

けです。

今年は太平洋地域の原住民の伝統的なリーダーの会議がありました。台湾原住民も代表が会議に参加しました。台湾が活路を見出すには太平洋の海を渡るしかありません。原住民が台湾という国を助けて、国際的ネットワークを開拓した時に国の性質も変わり、海洋国家となり、南太平洋の島嶼国へと変貌を遂げます。周辺の島嶼国との関係づくりも促進されます。ここに原住民の役割があります。未来の発展には重要な方向性だと考えています。

中村：台湾には、原住民の民族的・文化的なオリジナリティつまり独立性があるからこそ、他国の属国ではないと主張できる。それを民族的なつながり（オーストロネシア語族）のある太平洋の島嶼国に向けて発信することにはすごい可能性があると思います。例えば太平洋島嶼国連合のような組織に発展すれば、それが大国と均衡するパワーバランスを持ち、平和を作るんだというのが松島先生のお説であったと思います。



●パネルディスカッション2

「日台マイノリティの文化・アイデンティティの可能性」

コーディネーター：陳永峰（東海大学副教授）
／中村伸之（NPO 京都景観フォーラム）
コメンテーター：官大偉（国立政治大学民族学系副教授）／藤本英子（京都市立芸術大学教授）
パネリスト：鍾文観（花蓮縣部落大学執行長）
／亞弼・達利（至善基金会新竹工作站主任）／阿布・卡斐阿那（至善基金会達卡努瓦工作站站長）
／藤戸ひろ子（ミナミナの会）／井上明彦（京都市立芸術大学教授）／朴実（東九条 CAN フォーラム代表）

陳：東海大学の陳です。原住民や学者の皆さんの報告を聴きました。マイノリティ



と言ってもマイノリティではないんですよ、でしょ？ 台湾の原住民は国や民族を乗り越え、非常に自信を持って主張しています。これは在日コリアンや日本の部落民と比較すれば、行政に「何とかしてほしい」と強く求める点は同じですが、琉球・在日コリアンの問題は台湾の原住民にはないんです。自分と土地との関わりがあれば良い、という宇宙観・世界観は日本人には考えられないことかもしれません。

藤本：京都市立芸術大学で環境デザイン分野を教えています。

二点伺いたいことがあります。まず「見えない教育」ですね。私は小学校の時、確か「人間」という教科書で部落解放問題を学んできました。それはすべて「道徳」という教科でしたが、今はそういう形を取っていません。私たちは果たして、自分たちの生活のマナー、しきたりをど

ういう教育の中で教えているのだろうか？と改めて考えました。今の日本では家庭教育に拠っている、それだけで良いのだろうか、という考えに及びました。皆さんが自分たちの文化を継承していく時に、「見える教育」と「見えない教育」があるんじゃないか。「見えるアイデンティティ」と言えるかもしれません。例えば主食をもう一度取り戻して、食の文化を復活させる、土地の風景を変えていく、まさに私の分野ですけど、稲から粟へ変わると風景が変わるわけですね。そういう「見えるアイデンティティ」の復活をどう継承していくか。

もう一つ、「見えない教育」は言葉の問題が非常に大きいな、と思いました。そして道徳・しきたりなど、目に見えないものをどう継承していくか、それをこれからどうされていくのかをお伺いできましたら。

SONYではオリジナルの字体フォントを、90数カ国の言葉で「SONY」の文字を作っているという話を聞きました。ヘルベチカ（字体）でさえも20いくつかしかないのに。自分たちのアイデンティティをこういう形で広げていく、というやり方もあるんです。そういう新しい方法をお持ちでしたら、伺いたいと思います。

陳：一般的に女性も弱者とされていますが、ここに4名の女性がいらっしゃいますので、それをお聞きしたいと思います。

アイヌ族の藤戸さん、アイヌ族の現実の状況を説明していただけますか。

藤戸：私たちアイヌ民族は、今もなお就職差別・結婚差別が続いているのが現状です。元々アイヌ民族が住んでいた「北海道」という名も開拓後に付けられた名で、その後の「旧土人法」、私たちを勝手に土人扱いした法律ですね、名付



けた人たちが勝手に差別をした時代が今も続き、小学校の学校差別や女性の差別が続いています。この先どうやって変えていくか、私たちの世代で変えていかないと変わらないのが事実です。

世界で消滅する危機にある言葉の中にアイヌ語が含まれ、10～20年後にはアイヌ語が無くなっているんじゃないか、と問題視されています。アイヌ語を喋る事ができない教育なんですね。北海道に住んでいるアイヌの私たちでさえ、自分たちの言葉を学ぶ環境が無い。学校もありませんし、地区ごとにある「生活館」で週に一度、おじいさん・おばあさんが子供たちにアイヌ語・伝統・文化・風習を1～2時間、無償で教えている、それ以外に学べる環境が無いのが事実で、海外の方が原住民の文化活動が活発なのではないか、と思うんです。

刺青「シヌイエ」の問題もそうです。他の国の部族でも、女性の顎に刺青をする風習が今も残っていますが、その国では刺青を誇りに思っている。民族の言葉の継承にしっかりと力を入れて、育てているという国があることを最近知りました。日本は私たち民族に対して、国が起こしてきた問題をこれ以上掘り起こさせないための「臭いものに蓋」をしている状態、そこからなかなか抜け出せない私たちが今もいる、というのが現実です。

陳：台湾の民族も昔は刺青をやっていましたが、今は誰もやっていない。同じですね。

官先生、コメントをお願いします。

官：さきほど皆さんの発表を聞き、いくつか感想があります。

台湾原住民は国に認定されないと、支援の配分に問題が出る。身分が国の制度の中で認められて、初めて国・行政から予算が届くということですね。

しかもその予算では足りないんですね。チャレンジャーが自分の部落でバザーを催したり、寄付を呼びかけたり、資金をコツコツ集めて、シンポジウムを開催しようとしています。国の

支援に頼らず、どうやって自立していくのが重要じゃないかと思いました。キーワードは「人」、特に若い人ですね。さっき話がありましたように、原住民の若い人がだんだん都会に移っていく、部落に残るのは年寄りだけ。でも皆さんそれをクリアしておられますね。何かノウハウがあるのでしょうか？ 今までどのような壁にぶつかり、どのように克服してきたのでしょうか？ やはり若い人が中心にならないとダメですよ。

昨日、東九条では若い人がどんどん出て行く、という話を聴きましたが、これにどう対処するのか。何か試みをされているのか。



朴：そうなんですね。鴨川に近いこの東九条はピーク時の人口の1/5に減ってしまいました。空き地だらけになり、若い人たちもどんどん出て行ってしまい、街に活気が無くなりました。私たちは地域で運動しているコリアンだけではなく、日本人たち、あるいはボランティアの人たち、あるいは行政、できれば企業の人たちにも入ってもらって、新しいまちづくりをやりたい。特に近くに芸大が来るので、一部で既に現代アートをやっている若い人たちがきているので、その人たちも巻き込んで、どうやって地域を再生していくのか、それに取り組み出したところですよ。

藤戸：私たちアイヌ民族もどんどん人数が減っているのが現実で、次世代に伝える難しさがあります。今の子供たちは「アイヌ民族として生きていきたいくない」という子の方が多いんです。このまま途絶えてはアイヌ民族の言葉が無くな



ってしまう。でも子供たちは教わりたくない、教わっているところを見られたら、いじめ・差別に発展してしまう、それを私たちはどう支えていくか、課題なんですね。

中村：朴先生は「芸術の力でアイデンティティを持ちつつ地域に活力を」と、芸術に期待されておられます。その点はどうですか？

藤戸：私自身は幼少の頃から手仕事を祖父母から教わってきました。これは民族では当たり前のことなんです。今、アイヌ文様を今風にアレンジしたシルバーアクセサリーを作る方が増えています。それがアイヌ民族のものだと知っていたら、そこから広がると思います。

官：藤本先生と井上先生にも伺いたいのですが、京都市立芸術大学がこの地に移転するということですが、将来どのようにコミュニティや市民を巻き込んで芸術をパブリック化していくのか、何か構想をお持ちでしたら、お聞かせください。

井上：実は今回のチラシをデザインする時に、台湾の模様パターンを読み取ろうとしました。構造的な部分だけ持ってきているんです。裏はアイヌ文様を使おうとしました。藤戸さんが仰られたように、アイヌ文様は日本でも模様として認められていて、民族学博物館へ行きますとアイヌのコーナーがあって、たくさん本も出ていますし、実際に自分たちで縫ってみようという動きもあります。

マイノリティ文化の一番の特徴であり、われ

われ西洋由来の美術の概念で学んだ側が課題として感じているのは、手仕事・ものを作る事が暮らしの中に自然に溶け込んでいることです。逆に言うと、西洋近代は人の身体の中から手仕事の技術・知恵を奪って、専門化していく文化だということです。芸術に携わる人間として戦うべきなのはまさにここだと考えています。生活文化から切り離されて、それ自体として追求されてきた芸術を、もう一度大地に引き戻すことが問われています。

山内さんと話していたのは、崇仁は文様化し得るものの宝庫で、いろいろデザインし直していけるということです。われわれの仕事としては、新しい価値の創造というよりは再発見だと思いますので、価値付け直す、というやり方でどんどん外へアウトプットしていける、そういうふうに教育の視点を変えていくのかな、と考えています。



陳：服飾文化にも関係しますね。この面ではいかがでしょうか？ 自身の文化を取り戻すということですね。阿布さん、今着ておられる衣装は元々の自分を表現していないと仰っています。原住民の衣装を取り戻すという点について補足できるでしょうか。

阿布：自分たち少数民族の存在を宣言したいわけです。「稀な文化」と言われますが、民族の存在があってこそ実感できるわけです。「琉球人は日本人ではない」という発表がありました。私も非常に同感です。カナカナブ族の女性の一人として、世界にわれわれの存在をアピールしたいのです。それが出発点です。

なぜ民族衣装を取り戻さないといけないかというと、その服飾において、一つ一つの模様に原住民の審美観・魂が込められています。世界に見せたい美のコンセプトがあります。服飾の

模様を通してオリジンに帰れるわけです。長年、支離滅裂になっていた文化を完成させたい、という魂の要求です。

男性社会ですから、性別で差別されました。男性によって主流の権力が握られ、女性の声になかなか聞こえなかったんです。そして長老の経験・ノウハウを通して、ジェンダーを越えた協力が生まれ

ました。私がここでマイクを手に持って話すことがカナナブ族の女性の叫びです。



陳：この壇上の男性の方は名前を全員、漢民族名（通名）を使っていますね。でも女性のお二方は現住民族名を使っています。それはアイデンティティでしょうか？

亞弼：タイヤル族の命名は特別かもしれませんが。まず、どのような人になってほしいと期待を込めて名前を付けます。私の名の意味は、私の解釈ですが、「種を携えて、さまざまな部落を歩き来して種を撒く、それを繰り返す」ですね。私にとってはとても大事な名前です。「私が誰なのか」というシンボルです。

鍾：文字や言葉については、自分の重要なアイデンティティを表す方式ですね。けれども、それを使わなかったとって自分の文化を軽視している事にはなりません。植民地支配の痕跡がわれわれの文化に残ってしまったということでしょうか。多くの民族について、漢字は符号にしか過ぎないわけです。公式に使うものと、内輪のもの、そんなに明確ではないけれど、使い分けしているわけですね。女性は自分たちの本名（現住民族名）を使う。そうした傾向にあることは否めないでしょうね。

在日コリアンの場合はどうでしょうか？

陳：朴先生、在日コリアンにも同じ問題があるんじゃないですか？ コリアン名を持っているのに公的な場で通名を使っている場合はあるんですか？

朴：在日コリアンの場合、日常はほとんど日本の名前を使っていますが、本当は民族名を持っているんです。私の場合は日本国籍を取る時に、日本政府は「民族名を使うのはダメだ、それなら許可しない」というので、仕方なしに日本名を使いましたが、裁判を2回起こして、2回目で勝って、それが日本で初めての判例になったんです。全世界にコリアンは1,000万人近くいるんですが、在日だけが2つの名前を名乗っているんですね。日本スポーツ界やTVのタレントにも多くの在日コリアンがいるのに、全部日本名。コリアンであることはよく知っている人間でないと判らない。あの人たちが本名を名乗ったら、日本の社会も大きく変わると思うんですね。子供たちに、できれば民族の名前だけを使うように言っています。現実社会では難しいとは判っています。差別があり、民族名を名乗るとアパート・マンションに入居できない場合もありますし、土地や家の売りに障害が起こる事が現実にあるので、一度にはできなくても少しずつ直していきたい、それが私たちコリアンの願いです。



藤戸：私は日本名では「ひろ子」と言うんですが、民族名では「シロコ」、これは木肌の実、儀式の時に神様の捧げるための実ですが、その名前を付けていただいたんです。その名では差別・いじめに遭ってしまうので「ひろこ」とい

う日本名に持っている状態です。アイヌ名を付ける親もなかなかいないのが実情です。

戴：アイヌでも二つの名前を持っているようですね。私たちが生まれた時は、だいたいま漢民族の名を使いますね。若い人は問題ないんですが、ある程度、漢民族名に慣れた人は今さら原住民族名に直すとすれば、たいへんなエネルギーを消費します。それに困惑するのですね。便利さを追求して、今の名のままで良いという人も増えています。

私の名はDaiで、表音のアルファベット表記のルールがなかった頃でした。その後、ルールが制定され、政府から「D」を「T」に直しなさい、と指導がありました。なぜ今まで通用していた名を直さないといけないのか。次の世代、子どもたちは原住民の名を使っている子が多いんです。彼らはこれから人間関係を築いていくんです。原住民の名でも支障がない時代になったということですね。

陳：朴先生は「パク」を使っているんですね。在日本コリアンとすぐにわかるんですね。これは日本社会では都合の悪いところがあるんでしょう。でも使っていっちゃる。

朴：私は本来音楽家で、音楽を生業としていて、それほど影響はないんです。でも、それまで日本名を使ってピアノを教えたり、作曲をしていたんですけど、韓国名になったとたん生徒が何人かが辞めてしまいました。私の友人たちでは、客商売をしていると都合の悪い事があるようです。

阿布：私を「阿布」と紹介されると、非常にスカッとします。自分の名を通して人たちに民族を判っていただける、それによって民族の世界観を共有できると思います。今まで多くの人たちにそうしてきました。非常に誇りに思っています。

亞弼：私も「Yapit」と呼ばれた時、私の存在、誰の子どもであるか、この名を通して自分の家族の営みが判ります。部落に生きる、何代目であるかも判ります。自分たちの歴史ですので、誰にも奪う事はできません。漢民族の名を使つては民族の滅亡につながりますので使わない。自分の名を使っています。

中村：この第二部はマイノリティの問題を文化芸術の面から見て、その可能性を探りました。例えば伝統的な民族の文様を生かす。分業化されない身体的な手仕事の作品は非西洋的であるが、伝統を追求しつつ新しい文化を生み出すことができるというお話がありました。

さらに、アイデンティティの根源としての自然があります。狩猟民である原住民の文化の根源は自然にあります。自分たちの土地を取り戻す、名前を取り戻す行為は、自然との関係を取り戻すこと。その発露として芸術があるのではないかと思います。

井上：それぞれの民族が身近なアイデンティティを見直していくのは正しい事です。

気をつけないといけないのは、アイデンティティとは純粋なものではないんです。僕たちが押さえておかないといけないのは、アイデンティティというのは基本的には雑種である、スパンをもっと長く持たないとダメだということです。狭いアイデンティティは政治に陥ります。雑種性と流動性がある、それを踏まえた上でアイデンティティでなければ生きたものではないと思う。芸術はまさしくそうした意味での多様性の追求だと思います。

中村：ありがとうございました。これでパネルディスカッションを終了します。



6-6. 黄徳福 TFD 執行長・閉会の辞

国連では 1976 年に、人権をめぐる二つの経済・文化に関する国際的公約が結ばれ、今年 40 周年を迎えたわけです。

民主主義国家として考えると、日本も台湾もこれからも直面し、克服しなければならない問題がたくさんあります。また民族と人権とは普遍的価値を持つものです。民族は多元的な文化をお互いに尊敬し、お互いの人権を尊重し合う必要があります。一方的に何かを与えるのではなく、互惠関係を持つべきです。今回のシンポジウムもそうですが、マイノリティの活動は政治・経済的権利の獲得から文化アイデンティティの回復へと発展し、さらに民族の自立を求めたという長い過程があります。

すべての民主的な社会にとって、民主・人権を求める中で重視すべき、直面すべき過程です。台湾民主基金会 (TFD) は、国家レベルの基金会としてこれに貢献したいと思っています。

マイノリティと政府、お互いの協力の中で、政府が援助をしても、マイノリティは「自分たちは重視されていない」と感じます。自然資源が豊富にありながら、法的な規制で利用が制限されているとマイノリティは感じています。

NGO の一つとして、そこに果たせる役割があると光栄だと思い、誇りを持っています。こうした機会を生かして、マイノリティの権利の発展をさらに推し進めることができるとしています。

得難い経験になりました。台湾と日本の民間交流の中で、今までなかった部分です。国会議員・政府関係者による交流や観光における交流は盛んでしたが、このような深いテーマを双方の NGO 組織が語ったことは無かったと思います。共通の課題・共通認識を得られればと思います。交流もさらに深める事を望んでいます。

これが地球村というものです。皆さんは地球を構成するひとりひとりの個人と言えましょう。都市と山と土と空との交流が必要です。最後に改めて、成功に終わった事を感謝します。



財団法人台湾民主基金会 (TFD) のご紹介

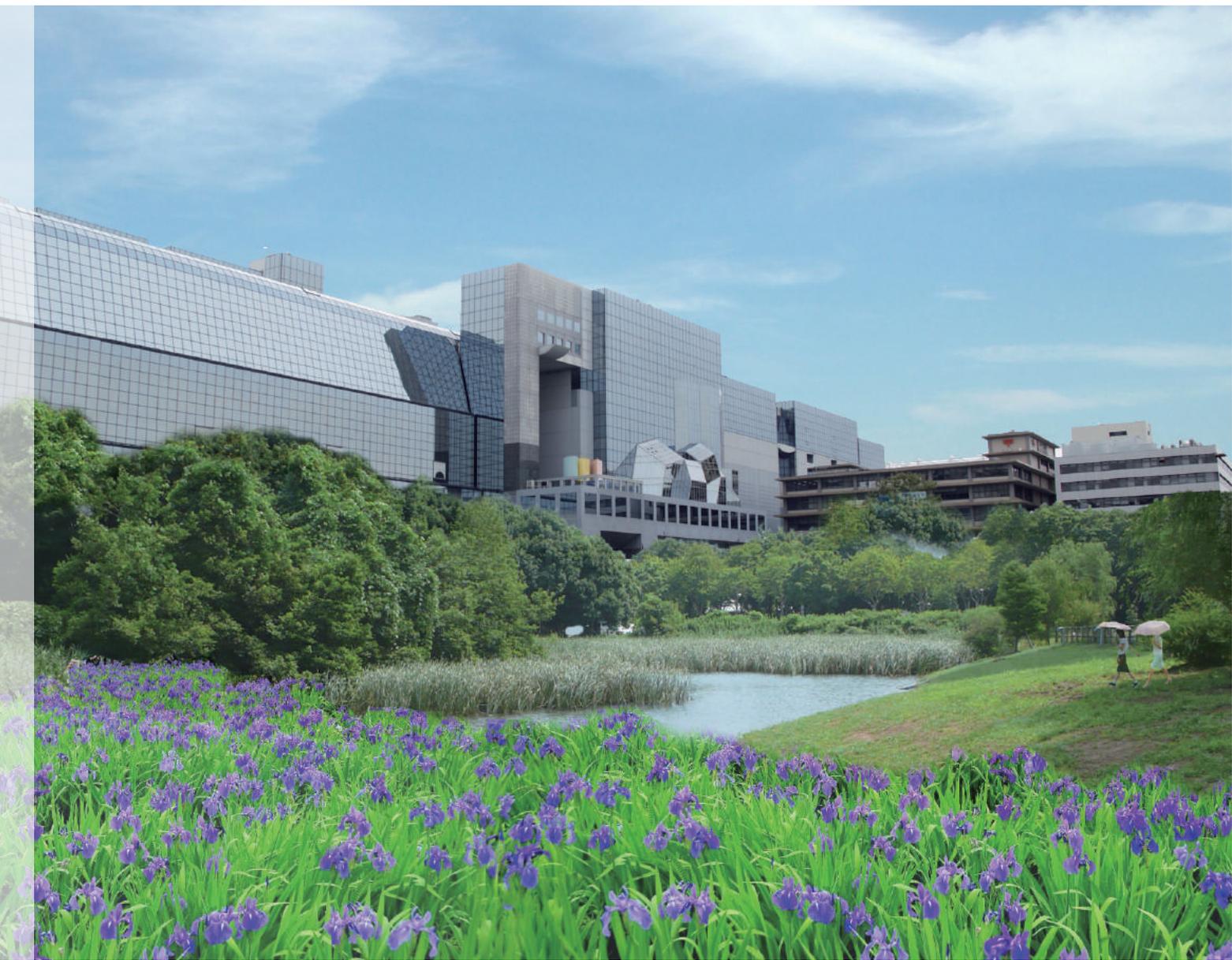
台湾の民主化は、2300 万・台湾人民の誇るべき歴史的な成果であるのみならず、国際社会においても画期的な出来事です。この民主化は一朝一夕に得られたのではなく、自由と人権を求める永い闘いの末に得られたものです。

台湾の民主化と人権の進歩をより強固なものにするためには、国際社会の長期的で堅実な支援と協力が必要であり、世界の民主勢力のネットワークとの連帯を促進しなければなりません。財団法人台湾民主基金会はこのような理念で設立されました。

2002 年より台湾外務省が積極的に設立準備を進め、2003 年元日に立法院の審議を経て予算が通過し、2003 年 6 月 17 日、財団法人台湾民主基金会は正式に成立し、立法院院長・王金平が初代会長に選出されました。

TFD の活動方針

- ・ 世界各国の民主化組織との連携
- ・ 国内外の学界、シンクタンク、民間 NGO の民主と人権に関する活動支援
- ・ 国内の各政党の議会外交や国際民主交流活動
- ・ 国内外の民主的発展の研究、政策の研究開発と出版
- ・ 民主・人権に関連したセミナー、公開フォーラム、民主教育活動



京都府地域力再生活動

この冊子は、京都市下京区区民が主役のまちづくりサポート事業、京都府地域力再生プロジェクト支援事業の助成を受けて作成しました。



KYOTO
culture and art program
2020